

第3章

大学満足度調査の概況

第1節
大学総合満足度の概況
—97～04年までの推移—

1. 全体での総合満足度

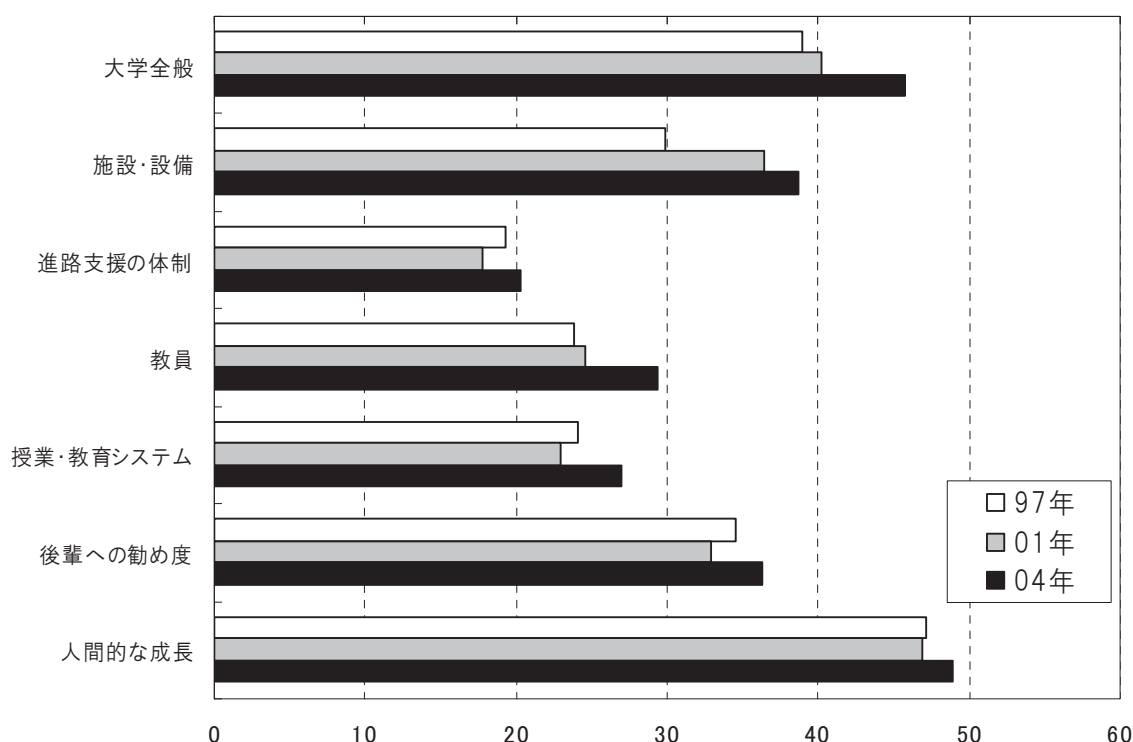
この節では、総合満足度の97年度調査からの全体推移を確認し、さらに学部系統別、入試難易度別に特徴的な傾向を確認する。また一部IPS尺度の4類型（アイデンティティの確立度）などの学生を類型化する尺度を用いて、学生の行動類型と大学満足度との関係についても考察する。

まず大学総合満足度の97・01・04年の調査結果の推移をデータ3-1に示した。まず大学総合満足度は97年から軒並み上昇してい

ることが確認できる。これは「大学全般」での伸びが確認されることから、大学全体として満足度が高まっていると考えられる。総合満足度のうち97年と比べて満足度が向上した項目として「大学全般」「施設・設備」「教員」が挙げられ、これら大学教育のインフラ面を中心に学生の満足度が向上していることがうかがえる。

全般的に向上している大学総合満足度であるが、一方で「進路支援の体制」は97年からあまり変化がなく、さらに総合満足度のなかで一番低い肯定指数であった。大学全体として進路支援の体制が、学生にとってあまり満足が得られていないことがうかがえる。さらに「教員」「授業・教育システム」といった教育の内容面も、97年から満足度の伸びが少なく、全体としては肯定指数が低い項目となっ

データ3-1 大学総合満足度の変化—97～04年—



〔注1〕数値は肯定指数＝とても満足(%)＋まあ満足(%)×0.5

ている。

これらのことから大学の満足度は97年に比べ全体的には向上しているものの、進路支援体制や授業・教員といった教育面での満足度において改善の余地があることがうかがえる。

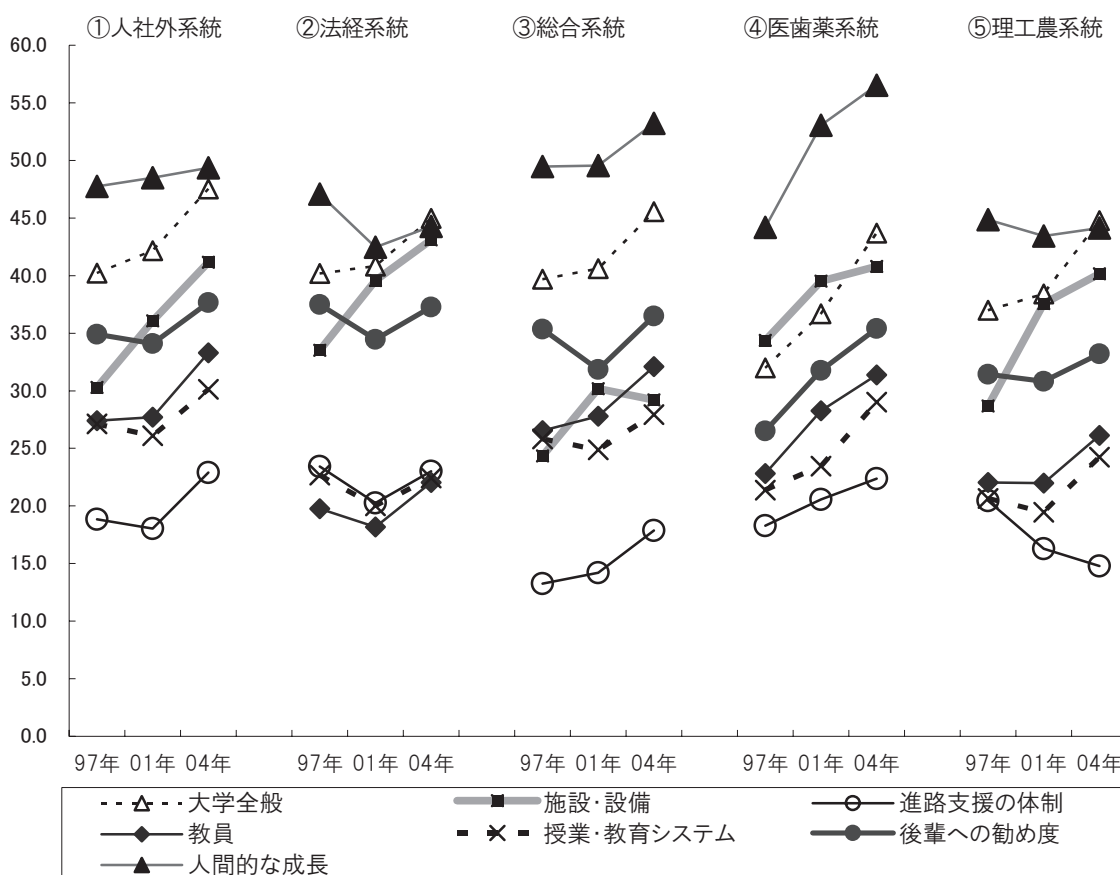
2. 学部系統別の総合満足度

次に学部系統別での総合満足度の推移をデータ3-2にグラフで示した。全体概況と同様、いずれの学部系統もほぼ全体的に満足度が向上する傾向がみられた。なかでも④医歯薬

薬系統は、「進路支援の体制」も含めた全ての項目において97年から満足度が向上している。逆に全体の傾向に反して満足度の変化が少ない学部系統や逆に低下している学部系統もみられた。

まず変化が少なかった学部系統として、②法経系統が挙げられる。この系統では「施設・設備」の満足度は他の学部系統と同様に向上しているが、その他の項目は97年の結果と比べ、あまり変化が見られない。また「人間的な成長」という項目は97年から比べるとダウンしている。また⑤理工農系統では「人間的な成長」が97年とあまり変化がなく、「進路

データ3-2 大学総合満足度の推移—学部系統別—



[注1] 数値は肯定指数=とても満足(%) + まあ満足(%) × 0.5

支援の体制」は97年以降一貫して低下しているのが特徴である。⑤理工農系統の学生が考える進路としては、大学院進学・一般企業等への就職が考えられるが、第6章で考察しているように、理系の就職が学校推薦から自由応募にシフトしつつあることが背景にあると考えられる。

さらに各学部別での傾向をデータ3-3に示した。全体的に学部別の満足度のスコアは、97年からみてあまり大きな変動がみられない。全体平均より10%以上高いボックスに□、10%以上低いボックスに○をつけているが、それぞれの学部で満足度がほぼ固定していることが確認できる。ここでは総合満足度全体としてあまり満足度の変化がみられなかった「進路支援の体制」と、満足度が相対的に低かった「教員」「授業システム」でみられる特徴を詳細に確認する。

まず97年から全体として満足度の変化がみられない「進路支援の体制」は、学部別で

は教育学部・理学部・工学部・農学部での満足度が低い結果となった。特に工学部は97年では「進路支援の体制」が全学部を通して満足度が最も高かったが、今回の調査では満足度が10ポイント程度ダウンし、満足度としては相対的に低くなっている。つまり「進路支援の体制」の満足度は、教育学部・理学部・農学部で一貫して低く、さらにここ数年で工学部の満足度が急速に低下したことが特徴として挙げられる。

次いで満足度として低い項目の「授業・教育システム」「教員」では、総じて人文学部・外国語学部は97年以降安定して満足度が高い傾向がみられる。一方で経済学部・工学部は一貫して満足度が低く、さらに工学部については「後輩への勧め度」「人間的な成長」も一貫して低いことが確認できる。

これらのことから、満足度のスコアは学部別で顕著な差異がみられ、さらにその傾向も97年以降一部を除いて、あまり変動していな

データ3-3 大学総合満足度の推移—学部別—

	全体	人文	外語	社会	法	経済	国際	教育	生活/芸術/総合	保健	医/歯	薬	理	工	農・水	
大学全般	97年	39.0	40.8	37.6	—	40.4	40.1	39.4	38.9	41.8	—	32.0	—	37.5	35.2	40.2
	01年	40.2	42.1	44.3	41.1	43.2	39.3	41.0	42.5	39.4	36.6	37.8	35.7	44.2	35.0	42.3
	04年	45.7	48.6	48.3	43.8	46.8	43.5	50.9	46.1	44.0	44.4	43.4	42.3	47.1	42.3	49.2
施設・設備	97年	29.8	30.5	29.6	—	30.4	35.6	32.8	13.0	38.1	—	34.4	—	29.1	32.0	21.3
	01年	36.5	35.4	37.5	38.0	38.5	40.3	37.9	21.1	34.2	49.0	29.9	35.4	39.4	38.6	32.5
	04年	38.7	41.5	46.7	36.8	43.2	43.1	34.2	22.3	34.7	44.7	29.8	38.9	39.7	41.4	37.4
進路支援の体制	97年	19.3	19.6	15.8	—	21.3	24.8	14.9	10.1	18.0	—	18.3	—	14.5	26.0	13.8
	01年	17.8	16.7	17.9	23.5	19.3	20.9	19.9	9.5	16.0	21.8	15.3	24.2	13.1	18.8	12.2
	04年	20.2	22.8	22.2	23.8	21.7	24.0	22.5	15.3	19.5	22.4	20.4	23.5	11.9	16.6	12.6
教員	97年	23.9	27.6	26.7	—	21.8	18.3	29.7	23.1	29.9	—	22.8	—	23.4	19.8	25.7
	01年	24.5	27.6	34.5	24.1	22.3	15.4	29.2	25.0	29.2	35.1	25.2	21.2	23.6	20.5	24.7
	04年	29.4	33.6	36.3	30.6	25.0	19.6	31.9	29.5	34.5	36.2	23.2	25.7	29.9	23.1	30.5
授業・教育システム	97年	24.1	26.5	29.7	—	23.6	22.1	28.1	21.7	31.8	—	21.4	—	21.7	19.3	22.7
	01年	22.9	25.2	32.9	25.7	23.0	18.0	23.2	23.7	25.8	27.8	19.6	21.1	22.5	17.7	21.3
	04年	27.0	30.2	35.1	27.1	24.0	21.1	30.2	26.4	29.0	30.0	24.5	29.6	26.9	22.5	26.3
後輩への勧め度	97年	34.5	34.9	34.8	—	38.7	36.7	34.1	34.6	38.8	—	26.5	—	30.6	29.1	37.1
	01年	32.9	33.5	37.1	34.8	36.9	32.8	32.4	33.5	30.7	33.3	30.9	30.4	35.2	28.1	33.9
	04年	36.3	37.7	41.2	35.4	39.4	35.6	38.3	38.4	34.4	35.9	35.4	34.2	34.6	30.7	38.6
人間的な成長	97年	47.1	47.7	47.8	—	46.9	47.2	50.1	50.1	47.3	—	44.2	—	45.2	42.3	50.1
	01年	46.9	47.9	49.0	50.5	45.6	40.4	51.1	53.0	47.2	59.7	54.5	41.7	43.6	41.5	49.1
	04年	48.9	48.7	51.3	50.0	45.4	43.3	54.1	55.9	50.6	62.1	51.8	47.0	42.9	42.0	50.9

[注1]数値は肯定指数=とても満足(%)+まあ満足(%)×0.5

[注2]□は全体より+10%以上の格差がついたボックス、○は全体より-10%以下の格差がついたボックス

[注3]97年の「社会」は「総合」に、「保健」「薬」は「医/歯」に含まれる

いことが確認できる。つまり大学全体での満足度は全学共通の施設・設備といったインフラ面を中心に全体として向上したといえるものの、学部ごとに進路支援体制や授業・教員といった教育面での満足度を向上させることが今後の課題といえよう。

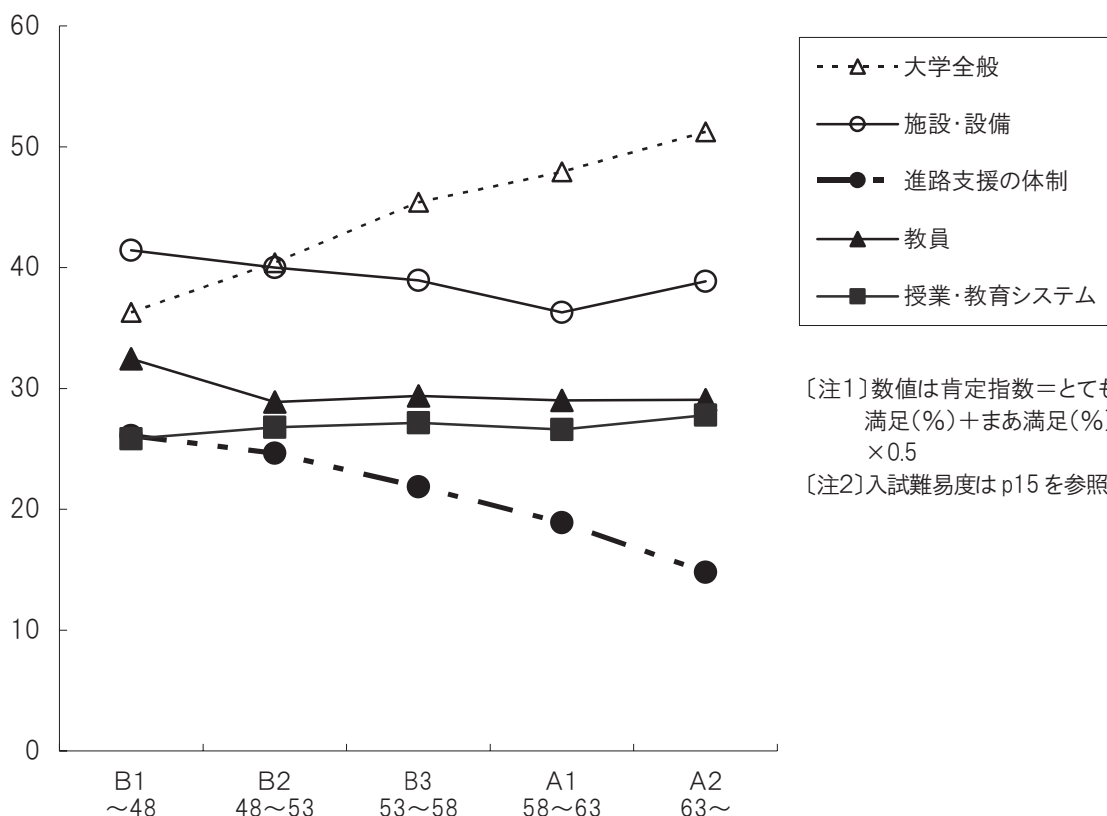
3. 入試難易度別の総合満足度

さらに入試難易度別での大学の満足度をデータ3-4に示した。「大学全般」の満足度は入試難易度と緩やかながら正の相関関係がみられ、一般にいう「難関大であれば満足度は高い」ということを示している。同様に入学後のイメージギャップにおいても、友人関係・校風といったキャンパスライフでのイメー

ジギャップが入試難易度に比例して小さくなっている（詳細は本章第2節を参照）ことから、周囲の環境や人間関係といったイメージ部分での満足度は入試難易度とある程度の相関があると考えられる。

しかし総合満足度のうち、「大学全般」以外の体験が加わった具体的な項目では、一概に難易度との明確な相関関係はみられなかった。むしろ「進路支援の体制」に至っては入試難易度と逆の相関関係がみられ、難関大ほど就職や進学といった出口にあたる部分の教育が学生にとって不十分であることがうかがえる。これらのことから、難関大であれば学生にとってイメージの部分での満足度は高いものの、授業・教育システムといったところではあまり差がみられず、さらに進路支援体制に至っ

データ3-4 大学総合満足度—入試難易度別—



では難関大ほど学生が不満を感じているということが導ける。

また全体の満足度として低い項目であった「教員」「授業・教育システム」は、入試難易度別での格差はあまり生じていないものの、地方の中堅私立大が大半を占めるB1レベルで、「教員」の満足度が若干高くなっていることが特徴であった。特にこれらの大学では、入学後のリメディアル教育が活発であることも背景として考えられる。

4. IPSの4類型別の総合満足度

次いで学生のアイデンティティの確立度（以下、IPS尺度）による満足度の相違を

検証する。IPS尺度とは、アイデンティティの自我と社会性の確立度合いをスコア化し、学生を4つの類型に分類したものである。自我・社会性とも確立している類型を達成型、自我・社会性とも確立していない類型を途上型とし、自我のみが確立している類型を自我型、社会性のみが確立している類型を社会型としている（詳細はp16を参照）。

データ3-5にIPSの4類型別の総合満足度を示したが、全体的に自我・社会性とも確立している達成型で満足度が高く、逆に途上型や自我型で満足度のスコアが低くなる傾向が認められる。まず「大学全般」では97年以降一貫して途上型の満足度が低く、達成型の満足度が高い。言い換えると自我・社会

データ3-5 大学総合満足度—IPSの4類型別—

		全体	IPSの4類型			
			途上	自我	社会	達成
大学全般	97年	39.0	28.8	36.4	40.3	49.8
	01年	40.2	30.2	38.3	41.3	50.7
	04年	45.7	33.0	41.1	46.7	56.4
施設・設備	97年	29.8	25.7	26.7	32.6	34.4
	01年	36.5	29.8	34.7	39.3	42.4
	04年	38.7	31.1	34.1	40.6	44.9
進路支援の体制	97年	19.3	12.4	15.7	21.3	27.3
	01年	17.8	10.9	13.6	20.8	25.4
	04年	20.2	12.7	13.9	21.4	27.9
教員	97年	23.9	16.6	21.1	25.8	31.6
	01年	24.5	16.4	22.2	26.7	32.8
	04年	29.4	19.9	23.9	30.6	38.0
授業・教育システム	97年	24.1	16.6	21.7	25.4	32.2
	01年	22.9	14.8	19.6	25.4	31.5
	04年	27.0	17.3	20.9	29.1	35.5
後輩への勧め度	97年	34.5	24.1	31.3	36.3	45.8
	01年	32.9	22.8	28.4	36.2	43.6
	04年	36.3	25.5	29.4	38.3	46.0
人間的な成長	97年	47.1	35.3	43.7	51.1	58.7
	01年	46.9	34.7	42.9	50.2	59.3
	04年	48.9	35.4	39.9	53.3	60.0

〔注1〕数値は肯定指数＝とても満足(%)＋まあ満足(%)×0.5

〔注2〕□は全体より+10%以上の格差がついたボックス、○は全体より-10%以下の格差がついたボックス

性が確立していない学生は大学で満足度が得られにくく、逆に自我・社会性とも確立している学生は満足度が得られやすいということになる。

さらに全体的に低かった「進路支援の体制」「授業・教育システム」では、途上型・自我型の満足度が低く、達成型で高い結果となった。このことから社会性が確立していない途上型・自我型に類型される学生は、これらの項目での満足度が得られにくいことがうかがえる。また97年以降、自我型での「進路支援の体制」「後輩への勧め度」「人間的な成長」の満足度のスコアが低下している。社会性が未熟で自我は確立している自我型の学生は大学の教育プログラムに反応しづらい傾向がみられる（第3節を参照）が、このような自我型の学生に対する進路支援体制や人間的な成長の部分でのフォローが今後より必要と考えられる。

第2節 大学でのイメージギャップ

1. イメージギャップの経年変化

第1節では大学総合満足度そのものの結果を分析したが、この節では満足の対極にある不満の要因と考えられるイメージギャップを中心に分析を行う。まず大学総合満足度とギャップの実感度による違いをデータ3-6に示したが、ギャップを感じる場面が「よくある」と回答した学生は総合満足度が低く、ギャップを感じる場面が「あまりない」「まったくない」と回答した学生は満足度が高いということが確認できる。またデータ3-6ではギャップを「よく感じる」とした回答群と「まったく感じない」とした回答群の比を算出しているが、平均して2倍程度、特に「後輩への勧め度」では3倍程度の格差が生じている。つまりイメージギャップを減少・軽減させるような取組みが、大学の総合

データ3-6 イメージギャップと総合満足度

	全体	ギャップを感じることはあるか					まったく/よくある
		よくある	ときどき	どちらとも	あまり	まったく	
大学全般	45.7	27.2	46.4	48.2	63.7	75.4	2.78
施設・設備	38.7	30.9	37.4	39.8	50.3	61.1	1.98
進路支援の体制	20.2	14.1	18.3	21.7	30.8	37.2	2.64
教員	29.4	20.5	28.1	32.3	42.2	48.6	2.37
授業・教育システム	27.0	16.3	25.8	28.7	41.6	47.2	2.89
後輩への勧め度	36.3	20.3	36.6	37.5	53.4	64.2	3.16
人間的な成長	48.9	38.6	49.4	48.2	60.8	68.5	1.77

〔注1〕 数値はギャップの実感度の各回答グループ別に、総合満足度の肯定指数=とても満足(%) + まあ満足(%) × 0.5 を示している

〔注2〕 □は全体より+10%以上の格差がついたボックス、○は全体より-10%以下の格差がついたボックス

〔注3〕 「まったく/よくある」は、「よくある」÷「まったく」で算出

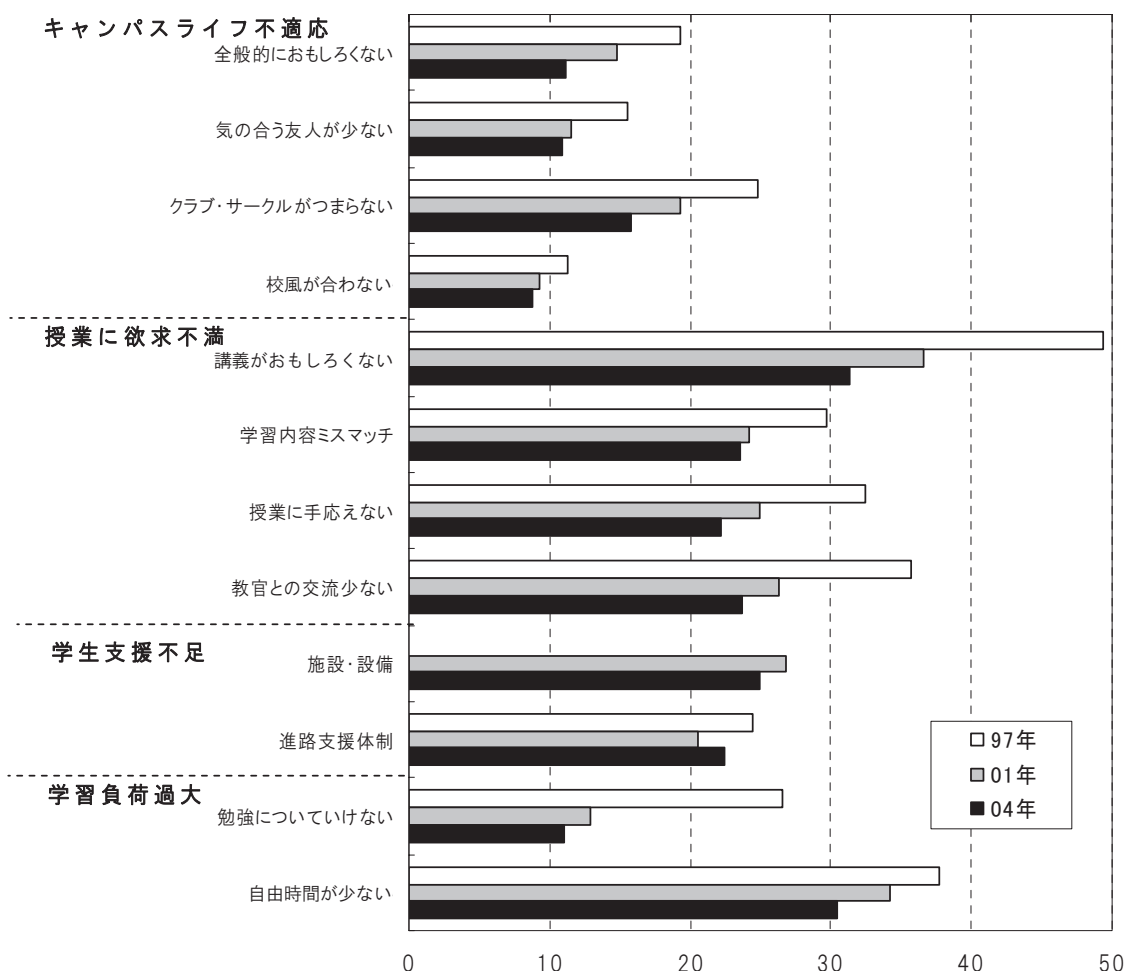
満足度の向上の仮説として挙げられる。

ではイメージギャップが97年以降どのように変化してきたかを、ギャップに関する12項目を4つのカテゴリに分類してデータ3-7で示した。全体的にイメージギャップは減少する傾向がみられ、特に「講義がおもしろくない」「勉強についていけない」「教官との交流少ない」などの項目を中心にイメージギャップは大きく減少している。講義や勉強に対するギャップが減少した直接の要因として、97年当時と比べ授業評価・リメディア

ル教育・TA制の導入・シラバスの整備などの大学側での教育改善が一般化してきたことが挙げられる。また教官とのコミュニケーションも、オフィスアワーなどの機会が制度的に運用されていることも挙げられる。しかしながら「講義がおもしろくない」は、今回の調査結果においても依然としてギャップの上位を占める結果となった。

一方でイメージギャップが改善されていない項目として「進路支援の体制」が挙げられる。ホームページ・学校案内等で就職実績

データ3-7 イメージギャップの変化—97～04年—



〔注1〕 数値は肯定指数＝とてもあてはまる(%)＋まああてはまる(%)×0.5

〔注2〕 カテゴリの分類は01年調査報告にならった

〔注3〕 97年の「施設・設備」はなし

や進路支援体制を公表している大学は多いものの、大学側が準備している進路支援の体制やプログラムと、学生側が実際に必要としていることとの乖離が考えられる。

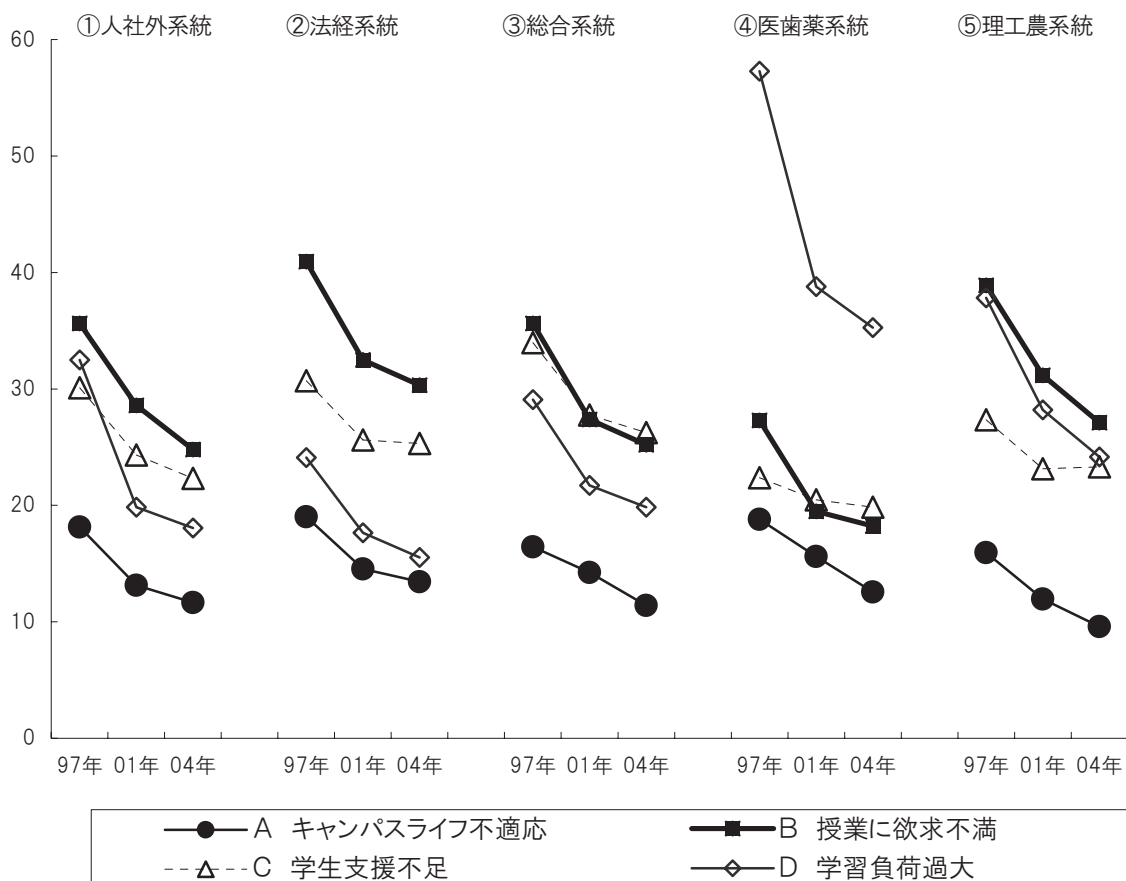
2. イメージギャップの学部系統別特徴

次に学部系統別でのイメージギャップをデータ3-8に示した。まず特徴としては④医歯薬系統で「勉強についていけない」「自由時間が少ない」などの学習負荷過大のカテゴリでのギャップが大きく減少している点である。要因としてはこの系統の集計人数が97年か

ら01年にかけて大幅に増加していることとも関係していると考えられる。しかしながら④医歯薬系統の学習負荷過大のカテゴリ平均値は他の学部系統と比べても高いということには変わらない。しかしこの系統においては「講義がおもしろくない」「教官との交流少ない」などの授業に欲求不満の肯定指数は他の系統と比べて低く、授業の内容への満足度は高いものの学習量が多いというジレンマを抱えていることがうかがえる。

また学部系統別では②法経系統と⑤理工農系統で、「講義がおもしろくない」「学習内容ミスマッチ」などの授業に欲求不満のカテゴリ

データ3-8 イメージギャップ／学部系統別の変化—97～04年—



[注1] 数値は肯定指数＝とてもあてはまる(%)＋まああてはまる(%)×0.5

[注2] 数値はカテゴリ代表の値。それぞれのカテゴリはデータ3-7を参照

での平均値が高いことが特徴であった。さらに②法経系統では学習負荷過大のカテゴリ平均値が低く、逆に⑤理工農系統では高いという傾向がみられる。すなわち②法経系統は学習面での負荷が少ないのに加えて授業の満足度が低いといった、比較的學生が学習から離脱しやすい状況にあるといえ、⑤理工農系統は学習面での負荷は大きいものの授業の満足度が低く、かけられた負荷に対する見返りが得られにくいという状況にあると考えられる。

さらに学部別の詳細なイメージギャップの傾向をデータ3-9に示した。全体としてイメージギャップは減少傾向にあるが、学部ごとにイメージギャップが高くなる項目が散見され、言い換えると学部特有のギャップが生じやすいことを示唆している。「講義がおもしろくない」などの授業に欲求不満というカテゴリでは、経済学部でのギャップが大きく、医・歯・薬・保健衛生学部で少ないという傾向がみられた。また「自由時間が少な

い」などの学習負荷過大というカテゴリでは、農水産学部を除く理系学部でギャップが大きく、外国語学部を除く文系学部でギャップが小さいという傾向がみられた。また「進路支援体制」「施設・設備」などの学生支援不足というカテゴリでは、教育学部でのギャップが大きいという結果であった。

さらに全体傾向でギャップとして大きかった「講義がおもしろくない」「自由時間が少ない」「教官との交流少ない」の3項目に注目すると、講義に対するギャップの大きい学部は法・経済・教育・工学部であり、自由時間に対するギャップが大きい学部として医歯薬・保健衛生学部、教官とのコミュニケーションでギャップが大きい学部として法・経済学部という結果であった。

まとめると、文系学部では総じて学習負荷に対するギャップは少ないものの、法・経済・教育学部で授業の内容、教育学部で進路支援体制や施設・設備でギャップを抱えやすい傾

データ3-9 イメージギャップ／学部別の変化-97~04年-

	調査 年次	全体	人文	外語	社会	法	経済	国際	教育	生活/芸 術/総合	保健	医/歯	薬	理	工	農・水
A キャンパスライフ不満足	97年	17.7	17.7	19.8	—	19.3	18.8	19.6	13.8	18.1	—	18.8	—	16.6	16.8	13.7
	01年	13.7	12.9	14.3	13.2	13.5	15.2	12.3	11.3	16.3	16.2	12.7	17.8	9.6	13.1	11.3
	04年	11.6	11.2	12.2	12.6	12.7	14.0	9.8	9.8	13.1	12.3	10.7	14.1	9.2	10.6	7.3
	一般的におもしろくない 気の合う友人が少ない クラブ・サークルがつまらない 校風が合わない	04年	11.1	10.0	10.9	12.5	13.2	14.4	8.4	9.5	12.6	10.9	9.6	14.7	8.0	10.4
B 授業に欲求不満	97年	37.2	36.0	34.1	—	39.6	41.8	35.8	38.5	29.0	—	27.3	—	39.1	39.8	36.9
	01年	28.6	28.9	22.6	31.0	29.5	34.5	29.3	30.8	25.0	18.9	23.3	16.4	30.9	32.0	28.8
	04年	25.7	24.7	21.7	26.8	28.8	31.5	24.2	27.7	23.1	18.5	18.6	17.4	26.9	28.1	24.6
	講義がおもしろくない 学習内容ミスマッチ 授業に手応えがない	04年	31.3	27.4	24.6	32.0	37.4	39.3	26.0	35.3	26.1	25.6	30.2	28.1	32.0	35.8
B' 教官との交流が少ない	97年	35.7	34.9	34.2	—	44.7	43.7	31.1	28.2	33.2	—	28.2	—	32.8	37.3	26.9
	01年	26.3	24.7	24.2	28.5	35.1	34.2	17.7	20.3	24.4	18.6	21.5	25.5	22.0	28.2	19.3
	04年	23.6	23.1	20.9	23.6	36.0	31.8	23.9	16.9	18.7	18.6	14.2	21.6	20.9	26.8	17.5
	学生支援不足	04年	30.0	30.1	30.0	—	31.1	30.4	30.3	38.1	29.8	—	22.4	—	28.3	27.0
C 施設・設備 進路支援体制	97年	24.6	24.7	24.3	22.6	26.2	25.2	18.6	32.7	26.4	17.3	23.7	21.8	21.6	23.4	24.2
	01年	23.7	22.3	21.1	23.2	26.0	24.8	21.0	29.4	24.4	19.6	21.2	19.7	24.0	23.6	21.9
	04年	25.0	22.2	21.3	24.3	20.6	21.2	22.5	41.8	29.1	21.7	33.2	23.8	22.6	23.0	24.3
	04年	22.4	21.5	21.0	21.8	21.5	21.3	16.6	29.7	25.5	18.4	16.2	13.8	28.5	21.1	24.0
D 学習負荷過大	97年	32.2	30.1	42.4	—	26.2	22.7	29.0	26.1	35.8	—	57.3	—	37.8	42.5	27.8
	01年	23.6	19.7	28.3	15.2	19.4	16.4	16.4	19.1	24.2	37.3	36.1	43.7	29.1	30.9	19.1
	04年	20.7	17.6	23.0	16.4	17.7	13.8	13.9	17.5	23.1	33.8	31.6	40.9	26.1	26.5	16.1
	勉強についていけない 自由時間が少ない	04年	11.0	6.9	9.6	6.1	12.5	9.5	5.8	8.1	9.2	16.3	16.6	24.8	22.2	18.6
04年	30.4	28.3	36.5	26.2	22.9	18.1	22.1	26.8	36.9	51.3	46.5	57.2	30.1	34.3	23.4	

[注1]数値は肯定指数=とてもあてはまる(%) + まああてはまる(%) × 0.5

[注2]カテゴリ代表の値は質問項目を相加平均したもの

[注3]□は全体より+10%以上の格差がついたボックス、○は全体より-10%以下の格差がついたボックス

[注4]97年の「社会」は「総合」に、「保健」「薬」は「医/歯」に含まれる

向があり、一方の理系学部は学習負荷に対するギャップは大きいものの、授業に対するギャップはそう大きくない。しかし工学部では学習負荷、講義や学習内容に対するギャップがいずれも大きいことが課題として挙げられよう。

3. イメージギャップの入試難易度別特徴

さらに入試難易度別でのイメージギャップをデータ3-10に示した。入試の難易度が上がるほど「クラブ・サークルがつまらない」「校風が合わない」などのキャンパスライフ不適應のカテゴリでギャップが小さくなる傾向がみられた。さらにデータ3-10ではA2レベルとB1レベルとの比を算出しているが、クラブ・サークル活動や校風は入試難易度でギャップの格差が大きいことを示している。

一方で入試難易度とイメージギャップと

の緩やかな相関関係がみられたのは、「進路支援体制」などの学生支援不足のカテゴリであった。その他のイメージギャップのカテゴリでは、入試難易度との明確な相関関係はみられず、また「講義がおもしろくない」「自由時間が少ない」といった全体でギャップの大きかった項目も入試難易度別での際立った傾向は認められなかった。

データ3-10 イメージギャップ／入試難易度別

	調査年次	全体	B1 ~48	B2 48~53	B3 53~58	A1 58~63	A2 63~	B1/A2	
A キャンパスライフ不適應	04年	11.6	16.2	14.2	11.9	10.2	9.2	1.8	
	全般的におもしろくない	04年	14.8	13.4	12.0	9.8	8.6	1.7	
	気の合う友人が少ない	04年	13.7	12.0	10.5	9.8	10.3	1.3	
	クラブ・サークルがつまらない	04年	22.5	21.1	16.4	13.8	10.7	2.1	
	校風が合わない	04年	8.8	13.9	10.4	8.6	7.4	7.1	2.0
B 授業に欲求不満	04年	25.7	26.0	25.1	26.3	26.4	24.9	1.0	
	講義がおもしろくない	04年	31.3	30.3	29.4	30.8	32.6	32.4	0.9
	学習内容ミスマッチ	04年	23.6	24.3	23.4	25.0	24.2	21.5	1.1
	授業に手応えない	04年	22.2	23.4	22.7	23.0	22.2	20.9	1.1
B' 教官との交流少ない	04年	23.6	20.5	24.4	24.2	23.0	24.3	0.8	
C 学生支援不足	04年	23.7	21.6	22.3	23.7	24.3	24.8	0.9	
	施設・設備	04年	25.0	23.4	24.1	25.8	26.7	23.8	1.0
	進路支援体制	04年	22.4	21.0	18.5	21.2	23.2	26.4	0.8
D 学習負荷過大	04年	20.7	18.5	20.6	20.6	20.2	22.1	0.8	
	勉強についていけない	04年	11.0	7.3	8.8	10.1	10.9	14.8	0.5
	自由時間が少ない	04年	30.4	29.7	32.4	31.1	29.4	29.3	1.0

[注1] 数値は肯定指数＝とてもあてはまる(%)＋まああてはまる(%)×0.5

[注2] カテゴリ代表の値は質問項目を相加平均したもの

[注3] □は全体より+10%以上の格差がついたボックス、○は全体より-10%以下の格差がついたボックス

4. IPSの4類型別のイメージギャップ

アイデンティティの確立度合いによるイメージギャップの相違をデータ3-11に示した。総じて自我・社会性とも確立している達成型はイメージギャップが小さく、自我・社会性とも確立していない途上型で大きくなるという傾向がみられた。つまり自我・社会性ともに確立していない学生にとって、大学生生活の教育場面または生活場面でイメージギャップが生じやすいということがうかがえる。

また「勉強についていけない」などの学習負荷過大のカテゴリでは自我型と達成型でのギャップが小さく、途上型・社会型で大きくなる傾向がみられた。言い換えれば、「自分のやりたいこと」がはっきりしている、自我が確立している学生にとっては学習の負荷に対するギャップは小さく、逆に「自分のやりたいことはわからないが、周囲に合わせる」と

いうような、社会性のみ確立している学生は学習の負荷に対するギャップを感じやすいとも言える。

なお97年からイメージギャップとして変化の少なかった「進路支援体制」は、IPSの4類型間で大きな差はみられなかった。つまり進路支援に関するギャップは、自我・社会性の確立に関係なく、ギャップを感じている項目であるといえよう。

5. イメージギャップがない状態

すでにデータ3-6に示したように、イメージギャップが少ないほど大学総合満足度が高くなる傾向がみられた。では学生の自分自身への期待が高まり度合い、自己効力実感レベルとイメージギャップとの間でどのような関係がみられるかを検証した。ここでは「イメージギャップを感じていない」とした

データ3-11 イメージギャップ／IPSの4類型別

	全体	IPSの4類型			
		途上	自我	社会	達成
A キャンパスライフ不適応	11.6	16.6	11.3	11.6	7.8
一般的におもしろくない	11.1	18.6	10.5	10.7	5.6
気の合う友人が少ない	10.9	17.5	10.0	10.7	6.0
クラブ・サークルがつまらない	15.8	18.7	15.6	16.6	12.9
校風が合わない	8.8	11.4	9.0	8.5	6.6
B 授業に欲求不満	25.7	30.9	26.7	26.4	20.5
講義がおもしろくない	31.3	37.0	33.4	31.9	25.2
学習内容ミスマッチ	23.6	29.2	23.6	24.7	18.2
授業に手応えない	22.2	26.4	23.0	22.5	18.1
B' 教官との交流少ない	23.6	27.4	23.1	24.6	20.1
C 学生支援不足	23.7	26.4	23.2	24.6	21.1
施設・設備	25.0	27.9	25.8	25.6	21.8
進路支援体制	22.4	23.9	20.7	23.7	21.3
D 学習負荷過大	20.7	23.8	17.2	24.0	17.6
勉強についていけない	11.0	15.9	8.4	13.1	6.7
自由時間が少ない	30.4	31.7	25.9	34.9	28.4

[注1]数値は肯定指数＝とてもあてはまる(%)＋まああてはまる(%)×0.5

[注2]カテゴリ代表の値は質問項目を相加平均したもの

[注3]□は全体より+10%以上の格差がついたボックス、○は全体より-10%以下の格差がついたボックス

回答をもとに「イメージギャップがない＝大学生生活に適應している」と読み替え、イメージギャップの否定指数をもとに作表したものをデータ3-12に示した。自己効力実感レベルと大学生生活への適應との間で強い相関関係がみられるのが「大学生生活」「校風」などのキャンパスライフに適應というカテゴリであった。つまり自分自身への成長実感が伴っている度合いが高い学生ほど、大学生生活全般で適應している状態にあるといえる。

さらに「進路支援体制」などの学生支援に満足や、授業に満足というカテゴリでは自己効力実感レベルの中位以下（L4以下）では緩やかな相関であるが、高位のL5 L6以上ではともに高い否定指数を示している。このことから自己効力実感レベルが高い、つまり自分自身への期待が高まっている状態にあ

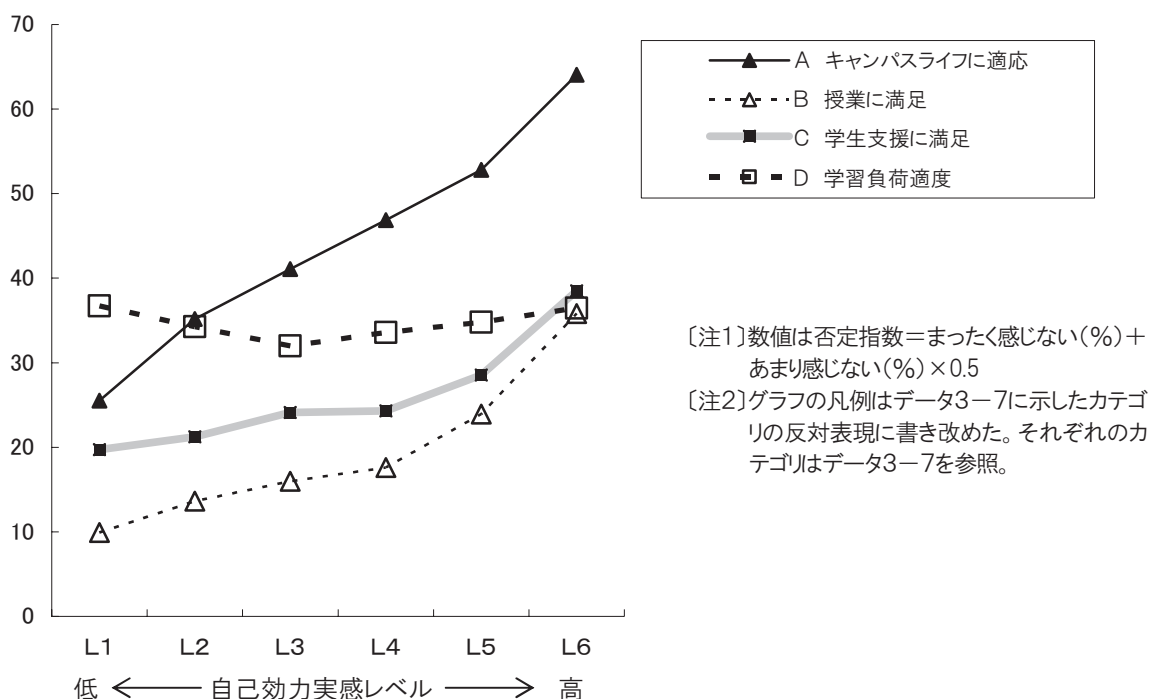
る学生は授業や進路支援体制に適應しているということがうかがえる。

なお全体としてギャップの大きかった学習負荷は、自己効力実感レベルとは明確な相関関係は認められなかった。

6. まとめ

大学教育に対するイメージギャップについて、学部系統・入試難易度・アイデンティティの確立度などの観点から、課題を焦点化した。全体的には大学側での教育改善の取組みやその情報開示が進んだこともあり、学生が大学生生活で感じるギャップは97年当時と比べて全般的に減少している。しかし依然として授業や進路支援の体制といった面でのギャップは大きく、また経年変化で学部系統ごと

データ3-12 イメージギャップのない状態／
自己効力実感レベル別(否定指数)



にギャップの発生する項目がほぼ特定されることが明らかになった。

学生にとっては入学前に知りうる情報・体験できるプログラムが限られること、また入学する大学・学部によって教育方針・方法・内容が異なることなどから、実際に大学教育を受けることで少なからずギャップは発生すると考えられる。ただしそのギャップが期待以上の「良いギャップ」であれば高等教育を受けることの価値とも考えられるが、「悪いギャップ」は大学教育への不満となることはデータ3-6からも明らかである。

一方でイメージギャップの発生は学生の所属する大学・学部系統にだけ要因があるのではなく、学生自身の社会性や自我の確立とも関係があることも検証した。イメージギャップを適切に解消し大学への満足度を高めるには、学部系統で固有に発生するギャップへの対策も必要であるが、さらには大学が提供する教育プログラムにより学生の社会性・自我の確立を促すことは、教育効果として学生自身が「悪いギャップ」を抱きにくくなり大学への満足度を高めることにもつながるのではないだろうか。

第3節 大学教育への期待と取組み

1. 期待と取組みの経年変化

第2節では大学総合満足度の差異の背景と考えられるイメージギャップに焦点化し検証した。では大学側が用意する教育プログラムに対して、学生はどの程度期待し取組んでいるのか。またそれらに取組むことでの満足度について、この節では経年での変化・学部系統での違い・入試難易度別・アイデンティティの確立度の切り口から検証する。

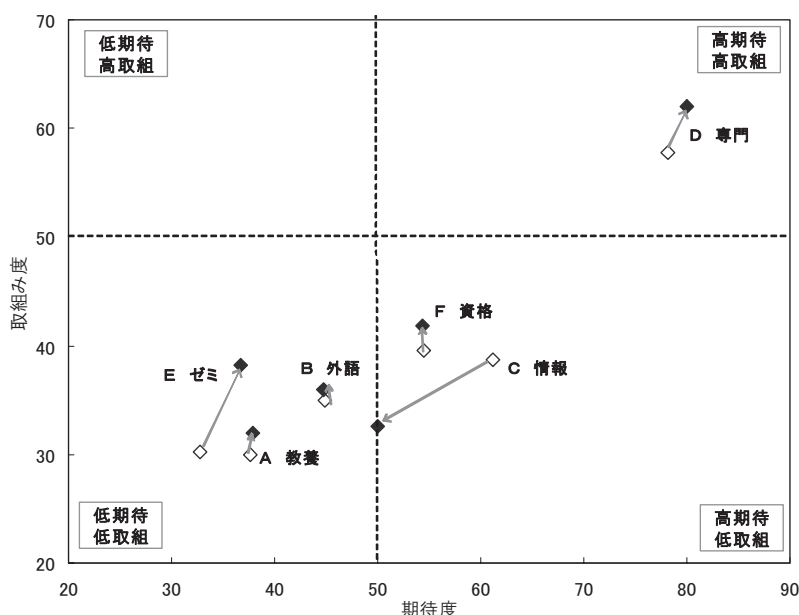
まず大学入学前に期待したこと（以下、期待度）と実際に取組んでいること（以下、取組み度）とし、横軸に期待度、縦軸に取組み度として01年から04年での変化をデータ3-13に示した。さらに期待度・取組み度とも高いところを「高期待・高取組」、期待度は高いが取組み度が低いところを「高期待・低取組」というように、期待度・取組み度それぞれ50ポイントのところを4つの象限に分けた。まず学生が大学教育に期待しかつ取組み度が高い「高期待・高取組」の項目として、専門科目の学習（以下、「専門科目」）が挙げられる。この「専門科目」は01年と比べ期待度・取組み度とも上昇しており、特に学部系統では④医歯薬系統、⑤理工農系統での取組み度が上昇している。第2章でみた進学動機の上位にある「専門科目の学習」が入学前から動機づけとなり、入学後も積極的にコミットしていることがうかがえる。

一方で大学教育に期待しているがそれほど学生自身が取組んでいない「高期待・低取組」の項目として、情報処理関係の学習（以下、「情報教育」）と資格取得の学習（以下、「資格取得」）が挙げられる。まず「情報教育」は

01年と比べ期待度・取組み度とも全体、各学部系統とも大きくダウンしている。この背景には、学生側でのIT環境の普及、また高等学校までの「総合的な学習の時間」や高等学校での「情報」科目の設置などにより、初心者を対象としたような「情報教育」のニーズが相対的に低下していることが考えられる。ただし期待度としては依然として高く、学生

側が高等学校段階までの情報教育にはない大学ならではの情報教育を期待しているとも考えられる。また「資格取得」は取組み度が若干上昇しているが、特に学部系統別では③総合系統、④医歯薬系統で取組み度の上昇がみられる。これらの学部系統は国家試験や免許の取得を目標とすることからも「資格取得」の取組み度の高まりは当然の帰結ともいえる

データ3-13 期待と取組み度の変化—01年・04年比較—



[注1]表中の◇◆は下表の期待度、取組み度よりプロット。◇:01年、◆:04年を示す。

		全体		①人外社		②法経		③総合		④医歯薬		⑤理工農	
		01年	04年	01年	04年	01年	04年	01年	04年	01年	04年	01年	04年
A 一般教養	期待度	37.7	37.9	42.3	42.9	40.5	40.9	37.8	36.0	30.0	29.7	32.0	32.8
	取組度	30.0	31.9	34.4	36.7	31.5	32.4	31.7	31.4	20.3	22.5	26.2	28.6
	行動転移率	79.7	84.2	81.3	85.5	77.7	79.1	83.7	87.2	67.8	75.8	81.7	87.1
B 外語教育	期待度	44.9	44.8	55.2	56.1	46.1	44.7	44.3	41.1	32.4	33.0	36.2	35.5
	取組度	35.0	36.0	44.2	46.4	36.4	35.5	34.5	32.6	21.5	23.2	28.2	28.6
	行動転移率	77.9	80.4	79.9	82.7	78.8	79.4	78.0	79.4	66.2	70.1	78.0	80.5
C 情報教育	期待度	61.2	49.9	59.3	48.2	66.3	55.8	60.9	48.6	48.7	37.8	65.9	54.2
	取組度	38.8	32.6	36.2	30.4	41.8	33.5	39.2	33.2	28.5	23.7	44.9	38.5
	行動転移率	63.3	65.2	61.0	63.1	63.0	60.0	64.3	68.3	58.5	62.7	68.2	71.2
D 専門科目	期待度	78.1	80.1	79.6	79.0	65.3	69.1	82.7	84.8	87.3	88.1	81.2	83.9
	取組度	57.8	62.0	58.1	60.9	47.8	51.5	62.0	66.7	69.8	74.0	57.8	63.8
	行動転移率	73.9	77.5	72.9	77.1	73.2	74.6	74.9	78.6	80.0	84.0	71.2	76.0
E ゼミ卒論	期待度	32.8	36.8	34.6	37.9	33.0	37.3	34.7	37.3	20.8	24.2	35.4	39.6
	取組度	30.2	38.2	35.5	41.5	32.5	36.4	32.6	40.9	19.5	28.8	23.7	36.0
	行動転移率	92.1	104.0	102.6	109.5	98.7	97.6	93.8	109.6	93.8	119.0	67.0	91.0
F 資格取得	期待度	54.5	54.3	52.2	53.0	51.0	49.2	57.5	60.6	85.5	86.3	40.1	39.3
	取組度	39.5	41.8	39.9	42.7	37.1	37.8	43.5	47.3	62.3	67.3	24.1	26.0
	行動転移率	72.5	76.9	76.4	80.6	72.6	76.7	75.8	78.0	72.8	78.0	60.0	66.3

[注1]数値は肯定指数=ととも(%)+まあ(%)×0.5

[注2]「行動転移率」は「取組度÷期待度」より算出した

[注3]01年と比べ、5ポイント以上の増減がみられた項目にアミをかけている

が、進学動機としても他の学部系統と比べ資格・免許の取得や専門的な知識の獲得といった**現実的学び志向**が高くなっていることを勘案すると、学生が職業に直結しやすい学部系統を選択し職業教育の多くを大学に求める傾向がより強くなってきているとも考えられる。

学生にとって大学教育で期待が少なくあまり取組んでいない「**低期待・低取組**」の項目として、外国語科目の学習(以下、「**外国語**」)、一般教養科目の学習(以下、「**一般教養**」)、ゼミ・卒論のための学習(以下、「**ゼミ卒論**」)が挙げられる。「**外国語**」「**一般教養**」は期待度・取組み度とも01年とあまり変化はないが、「**ゼミ卒論**」は期待度・取組み度とも全体的に上昇している。

また期待に対してどの程度行動に移っているかを行動転移率(取組み度÷期待度×100)として、100を超える項目は期待以上に取組んでいるという指標化を行った。全体としては01年から04年にかけて「**ゼミ卒論**」で100を超えており、ゼミ・卒論のための学習は学生が期待した以上に取組んでいるという結果となった。

このように01年からの変化をまとめると、「**情報教育**」の期待度・取組み度が低下していることは共通しているが、一方で「**専門科目**」「**ゼミ卒論**」での期待度・取組み度の上昇は、学生が専門教育に対してより期待するようになり、かつ取組みとしても真剣になってきているという傾向がみられる。これは第2章で確認した**現実的学び志向**(資格・免許の取得など)が強まっていることとも符合しており、学生の大学教育に対するニーズがより明確になってきたことをうかがわせる。

2. 期待と取組みの全体概況と学年別特徴

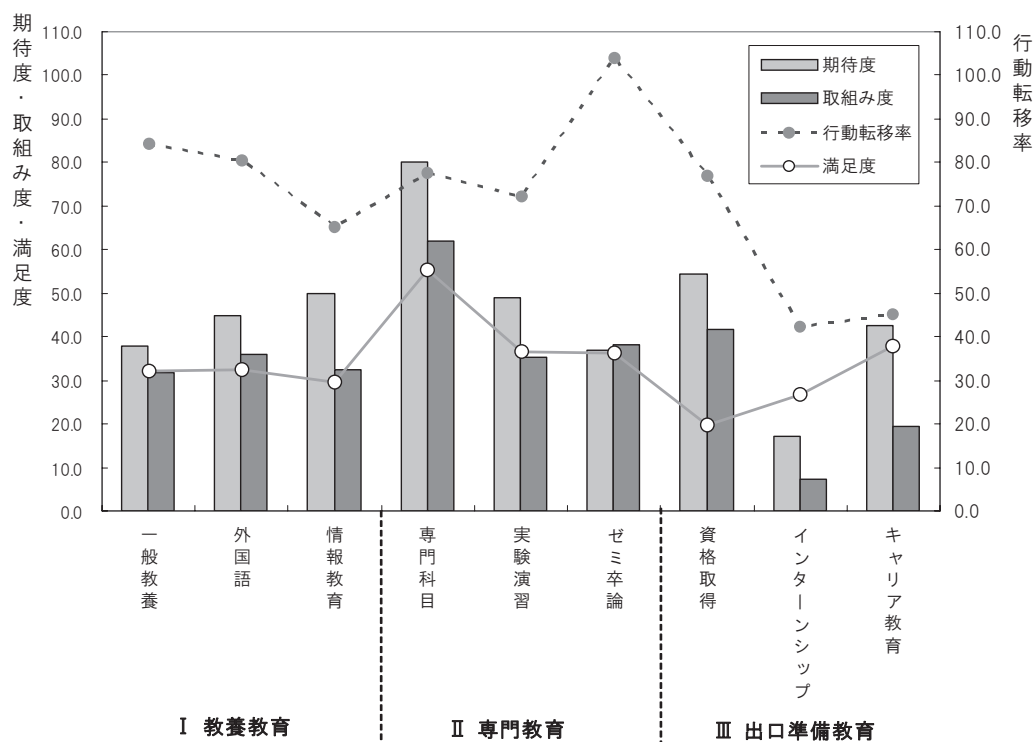
前節では経年での期待度・取組み度の変化について検証した。この節では今回の調査より追加した「**実験・演習・フィールドワーク**」などの体験的な学習(以下、「**実験演習**」)「**インターンシップ**の機会を利用した学習(以下、「**インターンシップ**」)」「**将来に向けたキャリア形成のための学習(以下、「キャリア教育**」)」の項目を合わせて3つのカテゴリ、すなわち**I 教養教育**：「**一般教養**」「**外国語**」「**情報教育**」、**II 専門教育**：「**専門科目**」「**実験演習**」「**ゼミ卒論**」、**III 出口準備教育**：「**資格取得**」「**インターンシップ**」「**キャリア教育**」に分類した。

まず今回の9項目についての期待度・取組み度・行動転移率・満足度を**データ3-14**に示したが、全体として「**専門科目**」「**資格取得**」の期待度・取組み度が高く、「**インターンシップ**」の期待度・取組み度が低い。さらに行動転移率では、「**ゼミ卒論**」が高い一方で、「**キャリア教育**」「**インターンシップ**」で低い結果となった。また満足度としては「**専門科目**」が最も高く、「**資格取得**」「**インターンシップ**」が低い結果となった。

ではそれぞれのカテゴリごとでの特徴について全体概況を確認する。

まず**I 教養教育**では期待度は「**情報教育**」>「**外国語**」>「**一般教養**」で、取組み度は「**外国語**」>「**情報教育**」>「**一般教養**」であった。「**情報教育**」は期待度としては高いものの取組み度は低く、結果として行動転移率も低くなっている。01年と比較しても「**情報教育**」の期待度・取組み度が低下していることから、大学側で従来通りに用意している情報教育と学生側が意図したものとの若干のずれが発生していることも考えられる。また「**一般教養**」の期待度・取組み度がともに低い結果となった。進学動

データ3-14 大学教育への期待と取組み—全体概況—



[注1] 数値は肯定指数＝とても(%)＋まあ(%)×0.5

[注2] 「行動転移率」は「取組み度÷期待度」より算出した

機として学問研究や教養を得るためといった知的学び志向は、専門的な知識の獲得などの現実的学び志向に次いでスコアが高かったものの、「一般教養」への期待度・取組み度といった行動面を検証すると最も低い項目となっている。つまり学生は進学に際して学問研究や教養の獲得といった学びへの十分な動機を持ちながらも、入学後の行動としては一般教養を学ぶ場面から離れているという状況がうかがえる。なおデータ3-15に学年別での期待度・取組み度・行動転移率・満足度を示したが、学年別で特徴が表れたのは「外国語」であった。2年生で取組み度が高く、これは1・2年生時に語学を必修単位としている大学が多いこととも関係があると考えられる。また満足度も教養教育的な教育プログラムは

低学年ほど満足度を得やすいということが考えられる。

次にII専門教育に対する期待度は「専門科目>実験演習>ゼミ卒論」の順で、取組み度は「専門科目>ゼミ卒論>実験演習」で、専門科目に対する期待度・取組み度とも高い結果となった。行動転移率に着目すると、「ゼミ卒論」の行動転移率は高いものの、「専門科目」「実験演習」では相対的に低くなっている。しかしデータ3-16の学年別のスコアを確認すると、いずれの項目も学年が上がるにつれて取組み度・行動転移率が高くなっており、学年間の格差も大きい。また「実験演習」「ゼミ卒論」の満足度も3・4年生で高くなる傾向がみられた。これは専門教育での実験・演習やゼミ・卒論などの教育プログラムが、学

データ3-15 大学教育への期待と取組み—一般教養—

		全体	学年別		
			2年	3年	4年
一般教養	A 期待度	37.9	38.0	37.6	38.5
	B 取組み度	31.9	34.2	30.2	33.2
	B/A 行動転移率	84.2	90.0	80.3	86.2
	C 満足度	32.2	35.9	32.0	31.3
	C/B 満足/行動	100.8	104.7	106.0	94.2
外国語	A 期待度	44.8	46.8	45.5	42.9
	B 取組み度	36.0	42.2	35.7	33.2
	B/A 行動転移率	80.4	90.2	78.5	77.4
	C 満足度	32.4	37.0	32.1	31.2
	C/B 満足/行動	90.1	87.6	89.9	94.0
情報教育	A 期待度	49.9	49.7	49.7	50.9
	B 取組み度	32.6	33.9	30.7	34.1
	B/A 行動転移率	65.2	68.2	61.8	67.0
	C 満足度	29.5	35.8	28.7	28.2
	C/B 満足/行動	90.8	105.7	93.4	82.6
I 教養教育	A 期待度	44.2	44.8	44.2	44.1
	B 取組み度	33.5	36.8	32.2	33.5
	B/A 行動転移率	75.8	82.1	72.9	76.0
	C 満足度	31.4	36.2	30.9	30.2
	C/B 満足/行動	93.7	98.4	96.1	90.2

データ3-16 大学教育への期待と取組み—専門教育—

		全体	学年別		
			2年	3年	4年
専門科目	A 期待度	80.1	79.7	79.4	80.8
	B 取組み度	62.0	57.7	60.6	65.7
	B/A 行動転移率	77.5	72.4	76.3	81.3
	C 満足度	55.3	56.3	54.3	55.6
	C/B 満足/行動	89.1	97.6	89.7	84.6
実験演習	A 期待度	49.0	49.6	47.8	49.5
	B 取組み度	35.3	27.1	34.5	40.3
	B/A 行動転移率	72.1	54.6	72.2	81.4
	C 満足度	36.5	29.3	37.8	39.9
	C/B 満足/行動	103.4	108.1	109.7	98.8
ゼミ卒論	A 期待度	36.8	28.9	34.5	41.6
	B 取組み度	38.2	11.2	32.0	55.6
	B/A 行動転移率	104.0	38.8	92.8	133.6
	C 満足度	36.2	27.7	36.2	40.7
	C/B 満足/行動	94.6	246.4	113.3	73.2
II 専門教育	A 期待度	55.3	52.7	53.9	57.3
	B 取組み度	45.2	32.0	42.3	53.9
	B/A 行動転移率	81.7	60.7	78.5	94.1
	C 満足度	42.6	37.7	42.8	45.4
	C/B 満足/行動	94.4	117.9	101.0	84.2

〔注1〕数値は肯定指数＝とても(%)＋まあ(%)×0.5

〔注2〕カテゴリ代表の値は質問項目を相加平均したもの

〔注3〕□は全体より+10%以上の格差がついたボックス、○は全体より-10%以下の格差がついたボックス

年の進行とともに充実したものが実施されることから取組み度・満足度の違いが現れていると考えられる。

最後にⅢ出口準備教育では、期待度・取組み度とも「資格取得>キャリア教育>インターンシップ」の順であった。「資格取得」は期待度・取組み度・行動転移率とも高く、出口準備教育として学生が最も取組みやすい項目であることを示している反面、「キャリア教育」や「インターンシップ」は期待度もやや低い項目で、かつ取組み度としてもかなり低い結果となった。しかし取組み度に対する満足度の指数はインターンシップで270程度、キャリア教育で140程度であり、取組むこと

による満足度は極めて高いことがうかがえる。データ3-17で学年別のスコアを示したが、いずれの項目も学年が進行するほど期待度は低下しているが、取組み度は上昇する傾向がみられた。また満足度では「キャリア教育」は学年別で大きな差はみられなかったが、「インターンシップ」「資格取得」は2年生で高い結果となった。これらのことは低学年時ほどインターンシップやキャリア教育への期待は強く、取組むことでの満足度も他の学年時に比べ得やすいということがうかがえる。逆に卒業年次が近づくと行動転移率は高まるものの期待度が低くなるという傾向がみられる。

データ3-17 大学教育への期待と取組みー出口準備教育ー

		全体	学年別		
			2年	3年	4年
インターンシップ	A 期待度	17.1	21.9	20.1	12.7
	B 取組み度	7.2	4.8	7.3	8.9
	B/A 行動転移率	42.2	21.9	36.3	70.1
	C 満足度	19.6	21.9	20.5	18.9
	C/B 満足/行動	272.0	456.8	279.9	213.0
キャリア教育	A 期待度	42.7	46.8	45.9	39.2
	B 取組み度	19.3	15.4	20.1	21.5
	B/A 行動転移率	45.2	32.9	43.8	54.8
	C 満足度	26.6	27.4	26.4	27.4
	C/B 満足/行動	137.8	177.7	131.6	127.5
資格取得	A 期待度	54.3	60.3	55.6	51.6
	B 取組み度	41.8	39.1	41.8	44.4
	B/A 行動転移率	76.9	64.8	75.2	86.0
	C 満足度	37.7	43.7	36.7	36.9
	C/B 満足/行動	90.2	111.7	87.8	83.0
Ⅲ 出口準備教育	A 期待度	38.0	43.0	40.5	34.5
	B 取組み度	22.8	19.8	23.1	24.9
	B/A 行動転移率	59.9	46.0	57.0	72.2
	C 満足度	28.0	31.0	27.9	27.7
	C/B 満足/行動	122.9	156.8	120.8	111.2

〔注1〕数値は肯定指数=ととも(%) + まあ(%) × 0.5

〔注2〕カテゴリ代表の値は質問項目を相加平均したもの

〔注3〕□は全体より+10%以上の格差がついたボックス、○は全体より-10%以下の格差がついたボックス

3. 期待と取組みの学部系統・入試難易度別特徴

では学部系統別と入試難易度別での期待と行動、満足度の違いを、さきほどの3つのカテゴリにならって検証する。

まずI教養教育をデータ3-18に示したが、カテゴリ全体としては①人社外系統での期待度・取組み度・満足度が総じて高く、④医歯薬系統でいずれも低くなる傾向がみられた。さらに項目別では「一般教養」「外国語」とも④医歯薬系統・⑤理工農系統で期待度・取組み度とも低く、①人社外系統で高い結果となった。「一般教養」「外国語」がおおよそ人文科学系の科目に位置づけられることから、いわゆる理系学部へ属する学生にとって期待・取組みとも専門科目と比して相対的に低くなっていることが考えられる。なお「情報教育」は④医歯薬系統で満足度が特に低か

ったが、②法経系統で期待度・満足度が高く、取組み度に対する満足度の指数も100を超えている。すなわち大学での情報教育に対して医歯薬系統の学生は満足度が得られにくいのが、法経系統の学生にとって情報教育は取組み以上に満足度が得られているということをお話している。

次に入試難易度別では、「情報教育」でB1・B2レベルで取組み度・満足度が高く、A2レベルで期待度・取組み度・満足度が低い結果となった。つまり情報教育の学生の取組み度・満足度は、入試難易度と逆に比例する傾向がみられた。

また「一般教養」はB1レベルで取組み度は高いが満足度は低く、取組みに対する満足度の指数も100を下回っている。なお「一般教養」で行動に対する満足度の指数が100を超えるのはB3レベル以上で、特にA2で顕

データ3-18 大学教育への期待と取組み——一般教養——

／学部系統・入試難易度別

		全体	学部別					入試難易度別				
			①人社外	②法経	③総合	④医歯薬	⑤理工農	B1 ~48	B2 48~53	B3 53~58	A1 58~63	A2 63~
1 一般教養	A 期待度	37.9	42.9	40.9	36.0	29.7	32.8	39.1	37.2	38.0	37.7	38.3
	B 取組み度	31.9	36.7	32.4	31.4	22.5	28.6	36.3	33.7	32.2	31.8	29.1
	B/A 行動転移率	84.2	85.5	79.1	87.2	75.8	87.1	92.8	90.6	84.7	84.3	76.0
	C 満足度	32.2	38.0	34.9	32.1	17.5	26.8	28.7	30.6	32.8	32.4	34.0
	C/B 満足/行動	100.8	103.6	107.9	102.3	78.1	93.6	79.1	90.9	101.8	102.1	116.6
2 外国語	A 期待度	44.8	56.1	44.7	41.1	33.0	35.5	38.7	40.2	45.5	46.4	48.1
	B 取組み度	36.0	46.4	35.5	32.6	23.2	28.6	33.7	32.3	36.8	37.2	37.6
	B/A 行動転移率	80.4	82.7	79.4	79.4	70.1	80.5	87.0	80.5	80.8	80.0	78.0
	C 満足度	32.4	45.3	36.1	26.8	14.8	21.9	32.1	29.4	32.7	32.0	35.0
	C/B 満足/行動	90.1	97.6	101.5	82.1	63.9	76.4	95.3	90.9	89.0	86.2	93.1
3 情報	A 期待度	49.9	48.2	55.8	48.6	37.8	54.2	57.1	53.2	50.9	49.6	44.4
	B 取組み度	32.6	30.4	33.5	33.2	23.7	38.5	44.4	38.5	33.6	30.8	24.7
	B/A 行動転移率	65.2	63.1	60.0	68.3	62.7	71.2	77.8	72.3	65.9	62.1	55.8
	C 満足度	29.5	30.3	35.7	25.8	19.0	31.2	40.2	33.6	30.6	28.4	22.9
	C/B 満足/行動	90.8	99.7	106.7	77.7	80.0	81.1	90.4	87.2	91.1	92.3	92.7
I 教養教育	A 期待度	44.2	49.1	47.1	41.9	33.5	40.8	45.0	43.5	44.8	44.6	43.6
	B 取組み度	33.5	37.8	33.8	32.4	23.1	31.9	38.1	34.8	34.2	33.2	30.5
	B/A 行動転移率	75.8	77.1	71.7	77.3	69.0	78.2	84.8	80.0	76.3	74.6	69.9
	C 満足度	31.4	37.9	35.6	28.2	17.1	26.6	33.6	31.2	32.0	31.0	30.6
	C/B 満足/行動	93.7	100.1	105.3	87.1	74.0	83.4	88.3	89.6	93.7	93.1	100.5

[注1]数値は肯定指数=ととも(%)+まあ(%)×0.5

[注2]カテゴリ代表の値は質問項目を相加平均したもの

[注3]□は全体より+10%以上の格差がついたボックス、○は全体より-10%以下の格差がついたボックス

著であった。

次にⅡ専門教育をデータ3-19に示したが、カテゴリ全体では④医歯薬・⑤理工農系統の期待度・取組み度・満足度が高く、②法経系統で低くなる傾向がみられた。項目別で学部系統間での格差が顕著だったのは「実験演習」で、④医歯薬・⑤理工農系統の期待度・取組み度が高く、①人社外・②法経系統で低くなった。学部系統間で比較すると④医歯薬系統は専門教育に対する期待と行動、満足度が望ましい状態にあるといえるが、逆に②法経系統は専門科目や実験演習などへの期待・行動・満足度が低く、法経系統の学生に対して専門教育への取組み度・満足度向上が今後の課題と考えられる。なお法経系統では「実験演習」の期待度・取組み度は低いものの、取組みに対する満足度の指数は200を超え、取組むことと満足度の関係が明確にあらわれやすい傾向がみられる。ちなみに法経系統は次に述べるⅢ出口準備教育の「インターンシ

ップ」の期待度・満足度とも、他の学部系統と比べ高くなっている。つまり法経系統で実験・演習・フィールドワークなどの体験学習の機会をより効果的に設けることは、学部教育自体への満足度向上と、体験学習で得た知識・体験を相対化・体系化する専門科目への学習動機づけとなりうることも仮説として考えられよう。

なお入試難易度別で、期待度・取組み度・満足度の大きな差異はみられなかった。

最後にⅢ出口準備教育をデータ3-20に示したが、カテゴリ全体では④医歯薬系統の期待度・取組み度・満足度が高く、⑤理工農系統で低くなる傾向がみられた。項目別では「資格取得」で③総合・④医歯薬系統の期待度・取組み度・満足度が高く、またこれらの学部系統では「キャリア教育」においても同様に高い結果となった。これらの系統は学部での教育内容が国家資格や免許の取得を目指したものであることから、期待度・取組み

データ3-19 大学教育への期待と取組み—専門教育—
／学部系統・入試難易度別

		全体	学部別					入試難易度別				
			①人社外	②法経	③総合	④医歯薬	⑤理工農	B1 ~48	B2 48~53	B3 53~58	A1 58~63	A2 63~
4 専門科目	A 期待度	80.1	79.0	69.1	84.8	88.1	83.9	80.3	78.8	78.6	80.8	81.7
	B 取組み度	62.0	60.9	51.5	66.7	74.0	63.8	63.1	63.2	62.1	62.5	60.4
	B/A 行動転移率	77.5	77.1	74.6	78.6	84.0	76.0	78.6	80.2	78.9	77.4	73.9
	C 満足度	55.3	51.1	45.0	56.0	83.2	59.0	54.4	55.4	54.5	53.7	57.9
	C/B 満足/行動	89.1	83.9	87.3	84.1	112.5	92.5	86.3	87.7	87.8	85.9	95.7
5 実験演習などの体験学習	A 期待度	49.0	42.6	31.9	54.7	64.5	63.1	50.1	47.8	48.7	50.2	48.6
	B 取組み度	35.3	27.8	14.9	41.0	60.9	50.2	34.4	35.6	36.0	36.5	33.8
	B/A 行動転移率	72.1	65.2	46.6	74.9	94.4	79.5	68.7	74.4	73.9	72.7	69.4
	C 満足度	36.5	35.9	33.4	39.0	45.1	34.2	33.1	35.1	38.3	38.7	35.2
	C/B 満足/行動	103.4	129.2	225.0	95.1	74.1	68.1	96.0	98.7	106.4	106.1	104.3
6 セミ卒論	A 期待度	36.8	37.9	37.3	37.3	24.2	39.6	34.4	35.3	36.7	38.2	37.4
	B 取組み度	38.2	41.5	36.4	40.9	28.8	36.0	39.7	38.1	39.2	40.0	35.3
	B/A 行動転移率	104.0	109.5	97.6	109.6	119.0	91.0	115.5	108.0	106.7	104.7	94.5
	C 満足度	36.2	40.2	35.9	38.4	35.4	27.7	33.0	34.2	37.9	37.9	35.5
	C/B 満足/行動	94.6	96.8	98.5	94.1	122.8	76.9	83.1	89.8	96.8	94.9	100.6
Ⅱ 専門教育	A 期待度	55.3	53.1	46.1	59.0	58.9	62.2	54.9	54.0	54.7	56.4	55.9
	B 取組み度	45.2	43.4	34.3	49.5	54.5	50.0	45.7	45.6	45.7	46.3	43.2
	B/A 行動転移率	81.7	81.6	74.3	84.0	92.6	80.4	83.3	84.6	83.7	82.1	77.2
	C 満足度	42.6	42.4	38.1	44.5	54.6	40.3	40.2	41.6	43.6	43.4	42.9
	C/B 満足/行動	94.4	97.7	111.2	89.9	100.0	80.6	87.8	91.1	95.2	93.8	99.3

[注1]数値は肯定指数=とても(%) + まあ(%) × 0.5

[注2]カテゴリ代表の値は質問項目を相加平均したもの

[注3]□は全体より+10%以上の格差がついたボックス、○は全体より-10%以下の格差がついたボックス

データ3-20 大学教育への期待と取組み — 出口準備教育 —

／学部系統・入試難易度別

		全体	学部別					入試難易度別				
			①人社外	②法経	③総合	④医歯薬	⑤理工農	B1 ~48	B2 48~53	B3 53~58	A1 58~63	A2 63~
7 資格取得	A 期待度	54.3	53.0	49.2	60.6	86.3	39.3	65.0	61.6	56.6	54.3	42.9
	B 取組み度	41.8	42.7	37.8	47.3	67.3	26.0	51.1	49.9	44.1	41.5	30.8
	B/A 行動転移率	76.9	80.6	76.7	78.0	78.0	66.3	78.6	81.0	77.9	76.5	71.7
	C 満足度	37.7	39.2	28.1	42.7	75.7	21.2	49.6	45.3	39.8	38.1	25.5
	C/B 満足/行動	90.2	91.7	74.5	90.2	112.4	81.5	97.0	90.9	90.2	91.8	82.9
8 インターンシップ	A 期待度	17.1	15.8	21.8	17.0	11.7	17.0	20.9	16.7	17.8	17.0	15.3
	B 取組み度	7.2	5.8	9.2	7.5	7.7	7.1	10.8	8.2	7.2	6.6	5.8
	B/A 行動転移率	42.2	36.9	42.3	43.9	66.0	41.8	52.0	49.3	40.6	38.8	38.0
	C 満足度	19.6	18.6	25.3	18.1	18.3	18.3	25.2	21.4	20.7	18.3	16.7
	C/B 満足/行動	272.0	317.6	273.9	241.9	238.0	257.9	232.2	259.3	286.7	276.8	287.5
9 キャリア教育	A 期待度	42.7	39.7	49.5	42.6	50.6	37.4	45.8	44.0	44.7	42.4	39.0
	B 取組み度	19.3	17.4	22.6	20.5	28.1	13.9	23.6	22.0	20.6	18.5	15.5
	B/A 行動転移率	45.2	43.7	45.6	48.2	55.6	37.2	51.5	50.0	46.0	43.6	39.9
	C 満足度	26.6	27.9	26.6	28.4	33.4	19.4	31.0	30.1	27.6	25.5	22.6
	C/B 満足/行動	137.8	160.4	117.7	138.0	118.9	139.5	131.4	136.9	134.4	138.3	145.6
Ⅲ 出口準備教育	A 期待度	38.0	36.2	40.2	40.1	49.5	31.2	43.9	40.8	39.7	37.9	32.4
	B 取組み度	22.8	22.0	23.2	25.1	34.4	15.7	28.5	26.7	24.0	22.2	17.4
	B/A 行動転移率	59.9	60.7	57.7	62.7	69.4	50.2	65.0	65.5	60.4	58.6	53.6
	C 満足度	28.0	28.5	26.7	29.7	42.5	19.6	35.3	32.3	29.4	27.3	21.6
	C/B 満足/行動	122.9	129.9	114.9	118.3	123.5	125.3	123.6	120.9	122.6	123.0	124.4

〔注1〕数値は肯定指数=とても(%) + まあ(%) × 0.5

〔注2〕カテゴリ代表の値は質問項目を相加平均したもの

〔注3〕□は全体より+10%以上の格差がついたボックス、○は全体より-10%以下の格差がついたボックス

度とも高くなることがうかがえる。一方で⑤理工農系統は「資格取得」「キャリア教育」の期待度・取組み度・満足度が低く、④医歯薬系統と対照をなしている。理工系学生の進路として大学院などへの進学や専攻内容に応じた就職が考えられるが、理工系学生の就職活動が教授・研究室などを通じた学校推薦制から自由応募にシフトしつつあることから、今後に向けて学生が主体的にキャリア形成を考える教育機会も必要になってくるのではないだろうか。

なお②法経系統では、「インターンシップ」「キャリア教育」での期待度・満足度が高く、特に「インターンシップ」では満足度も高い結果となった。法経系統はⅡ専門教育の「実験演習」で取組みに対する満足度の指数が極めて高かったが、このような実体験を伴った教育プログラムに反応しやすいことがうかがえる。

入試難易度別では期待度・取組み度・満足度ともB1・B2レベルで高く、A2レベルで低くなっており、入試難易度と逆比例する形で期待度・取組み度・満足度が高くなる傾向がみられた。このことは入試難易度が中堅以下の大学では、出口準備教育に対して学生の取組みとそれに対する満足度が得られている一方で、いわゆる難関大では学生側での期待・取組みとも低く、また満足度もそれほど得られていないことがうかがえる。

第4節 焦点化される2つの課題

この章では 97～04 年までの大学総合満足度について、経年での比較、学部系統別、入試難易度別を中心に検証した。さらには大学満足度の阻害要因と考えられるイメージギャップの発生、また大学教育への期待と取組みについても検証した。

全体的に大学総合満足度は 97 年以降の調査結果と比べ、全体的に向上する傾向にある。しかしながら進路支援体制や授業・教育システムでの満足度が他の項目と比べて相対的に低く、大学教育での満足度を高める上で「進路支援」と「授業・教育方法」は避けて通れない課題であることが明らかになった。

また入学後のイメージギャップについても、全般的に改善されてきており、大学生の不適応は軽減されているかに思われる。97 年の調査時に比べ、大学改革の一環として各大学で実行されてきた施策の成果と、その情報開示・提供が学生になされていることが背景に考えられる。

しかしながら依然としてギャップの大きい項目は、授業・学習に関するものであり、進路支援体制に至っては 97 年当時からはほぼ変化していないと良いレベルである。さらにイメージギャップはそれぞれの学部によって実感する度合いと場面が異なることが確認されたが、大学改革を推進していく上で全学として取り組む施策と、それぞれの学部の抱えている課題に対して必要となる施策が異なることを示唆するものと考えられる。

一方で大学教育への期待と取組みについて検証したが、キャリア教育は期待・取組みとも低いものの、実際に行動に移していただくことで満足度が得やすい構造にあることがうかが

える。その典型はインターンシップであることも調査結果より明らかになった。

さらに学生が学習から離脱しやすいという課題が見出された法経系統では、専門教育への取組みに対する満足度が実験演習などの体験学習において期待・取組み以上の満足が得られることも明らかになった。

これら総合満足度・イメージギャップ・大学教育への期待と取組みを概観すると、大学は進路支援体制と授業・教育方法の課題に直面しているといえる。しかしこれらの課題は、取り組むことで「期待以上の満足」を得やすいキャリア教育や専門における体験学習によって改善されるのではないかという仮説が導き出された。